ほんばこ　令和　４　年　２月―２　　家の人と話し合ってみよう

薦めてみる本　**菅野覚明『本当の武士道とは何か　日本人の理想と倫理』**ＰＨＰ新書２０１９年１２月

１　著者　**菅野覚明 :** 1956年生まれ。東大大学院人文社会系研究科教授、皇學館大学教授、東大名誉教授。著書『本居宣長』『詩と国家』『武士道の逆襲』『神道の逆襲』『武士道に学ぶ』などなど。（本の著者紹介から）

２　**『本当の武士道とは何か』**: 本の主張を大まかにまとめると次の通り。

・「武士道」という言葉は様々に使われがちだが、『甲陽軍艦』の「脇差心」(20頁)、『葉隠』の「死に狂ひ」(25頁)に見るように、「戦国時代までの、実際に戦闘が行われていた時代に培われたもの」(41頁）であり、「強さ」（２９頁）を前提とし、自分の死に様を思い描く「観念修行」(44頁）をするものだった。新渡戸稲造の「武士道」は本当の「武士道」ではない（21頁)。現代人は「忍耐」「辛抱」などの「強さ」が足りない（31頁)。

・近代は人間を取り替え可能な存在にし、「らしさ」（武士らしさ、職人らしさなど）を失わせた。(60~61頁）

・「文武両道」の「文武」とは、孔子の言う「礼楽」と「征伐」であり、「知育、徳育、体育」の「徳育」に関わるのが「文」。「知情意」の「情」に関わるのが「文」(84頁)。「もののあわれを知る武士」が「最強の武士」だ（107頁)。

・「武士道」という言葉の早い使用例は近世前期（113頁)。戦国期の朝倉宗滴は手の内を見せず、命令は明確に出す（121頁)。山本常朝の父は「嘘を言え」と教えた（5頁）が朝倉宗滴は「嘘をつくな」とした（124頁)。

・徳川時代の武士は営利活動を行う町人を蔑んだ(134頁)。新渡戸稲造は近代の「損得哲学」(143頁）を敵視した。福沢諭吉は「利」の追求を肯定した（145頁)。司馬遼太郎は近代の合理的精神が好きだった。武士道は、「勝つためには何でもする現場をのたうち回っているなかで、武士たち自身が発見した、「損得哲学」を超える「道」だ（155頁）

・「武士たちが、他の価値あるものすべてを捨ててでも守ろうとした『最も大切なもの』」とは、「日本の風土に根ざし、家族が一体となった『家』の生活」だった（167 頁)。柳田国男は東京大空襲に際し『先祖の話』を書き「家」を守るべきとした(183頁)。『サザエさん』も橘曙覧も戦後の皇室も「和気藹々の団欒」を大切にしている(203~204頁)。

３　いくつかの疑問を記す。

・戦国期までの戦闘者の武士道と明治武士道とは違う、というのはよくわかる。著者は前者を支持しているように見える。だが、後者（特に新渡戸稲造のそれ）はきわめて高度な精神性を持っていて、私はそちらを支持したい。戦闘者は所詮戦闘者である。「勝つ」「死ぬ」を連呼する前に、「戦いを避ける」「共に生きる」道を探りたい。伊勢崎賢治は戦闘をなくし、中村哲は予め戦争が起きないようにした。勝海舟と徳川慶喜は江戸決戦を回避した。ケネディーはキューバ危機を回避した。「剣を鋤に換える」智慧が人類にはある。中江藤樹も武士を捨てた。新渡戸稲造や内村鑑三はその知恵を継承する者だ。法然は父親を殺されたが敵討ちをしなかった。

・「日本人の」と問題を限定するのはなぜか？（西部邁もそうだ。）「日本人」の中に大陸や西洋にルーツを持つ人は入っているのか。南九州以南や東北以北は入っているのか。日本列島に住み着いた人は樺太（サハリン)、朝鮮半島など大陸、南西諸島、太平洋の島々など多方面から来ている。柳田国男はなぜ一国民俗学に固執したのか。

・和辻『風土』の紹介がある(193頁など)が、古代ユダヤ教の骨格は沙漠ではなくバビロン捕囚時にできあがった。ユーフラテス川の支流ケバル川（運河）岸には柳がある（エゼキエル1-1, 詩編137)。「沙漠の宗教」と言えるのか？また今後は温暖化で風土が変わり道徳も変わるのか？

・家族の幸せは私も願う。だが、家族を作らない人、作れない人、作っても壊れた人、様々な人がいる。誰もが幸せになるべきだ。イエ、ムラ、クニが理不尽に人を排除することはある。そのとき排除された人はどこへ行くのか。イスラエル共同体から排除された人とともにイエスはいた。釈尊は自分のカーストを捨てた。法然上人は戦闘で親を殺された。現代は貧困や孤立ゆえ家族を作って子育てをすることが難しい現実がある。「書類一枚書いて役所に行けば手当が貰える」と言うのは現実を見ていない。書類一枚書けず役所に持って行けない人もいる。担任や保健の先生が代わりに書いたりしているのだ。『サザエさん』の波平は東京に一戸建てを持ち安定した所得がある。現代の働く人はそう簡単にはいかない。「福祉」への皮肉が一言書いてある（140頁）が、「福祉」（社会的包摂）は単なる金銭至上主義ではなく人間の尊厳の問題である。

＊読んでみよう→菅野覚明『武士道の逆襲』『本当の武士道とは何か』、本郷和人『なぜ武士は生まれたのか』、新渡戸稲造『武士道』、内村鑑三『代表的日本人』、小池嘉明『葉隠』、相良亨『武士道』『武士の思想』、『今昔物語集』『平家物語』『五輪書』『葉隠』『甲陽軍鑑』『三河物語』『軍人勅諭』『国体の本義』『終戦の詔勅』、坂口安吾『堕落論』、植芝盛平『武産合気』、内田樹『修行論』

・・・

（中南米の文学）カブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』『族長の秋』、バルガス＝リョサ『緑の家』『ラ・カテドラルでの対話』『密林の語り部』、カルペンティエル『失われた足跡』、ファン・ルルフォ『ペドロ・パラモ』『燃える平原』、フェンテス『アルテミオ・クルスの死』、コエーリョ『星の巡礼』『第五の山』、コルタサル『追い求める男』、ナイポール『ミゲル・ストリート』、ジーン・リース『サルガッソーの広い海』（カリブ海）、ヘミングウェイ『老人と海』『海流の中の島々』（メキシコ湾）など。

薦めてみる本　　**バルガス＝リョサ『ラ・カテドラルでの対話』**岩波文庫（丹　敬介・訳）
Mario Vargas Llosa〝CONVERSATION　EN　LA　CATEDRAL〟

１　作者　**マリオ・バルガス＝リョサ**（1936～）　ペルーのノーベル文学賞作家。ペルーのアレキパ生まれ。1958年、国立サン・マルコス大学卒業。1959年、短編集『ボスたち』でデビュー。63年、長編小説『都会と犬ども』で一躍脚光を浴びる。66年、大作『緑の家』により、ラテンアメリカ文学を代表するもっとも優れた作家の一人として内外より賛辞を受ける。1976年、40歳にして、国際ペン会長（~79年）。『ラ・カテドラルでの対話』(69年)、『パンタレオン大尉と女たち』(73年)、『世界終末戦争』(81年)、『密林の語り部』(87年)、『アンデスのリトゥーマ』(93年)、『チボの狂宴』(2000年)、『楽園への道』(2003年)、『ケルト人の夢』(2010年）などの小説のほか、エッセイ集、フローベール論、ガルシア＝マルケス論などもある。2010年ノーベル文学賞受賞。(岩波文庫の作者紹介・訳者あとがきなどから)

２　**『ラ・カテドラルでの対話』**登場人物　読みやすくするため、少しまとめておく。(ネタバレを含む。)

（１）**サンティアーゴ**の家族と友人の物語：**サンティアーゴ**：ヤセッポチで秀才。金持ちで権力の中枢にいる父親に愛されているが、反抗し、左翼の友人と交友、さらに政治活動から身を引き、新聞社員となって三面記事を担当する。「自分はなぜだめになってしまったのか？」と自らに問いかけるが、父親の死後家族と和解するなど、救いの方向性もある。白人。

ドン・フェルミン：父親。金持ちで会社経営者。上院議員。首都リマのミラフローレス（高級住宅街）に住む。自分なりには家族、特に息子のサンティアーゴを愛している。ある秘密がある。

ソイラ夫人：ドン・フェルミンの妻。サンティアーゴの連れてきた妻の出自が卑しいと否定する女性。／チスパス：兄。父の会社を継承。／テテ：妹。隣家のポパイ・アルバロ（ソバカス）と結婚する。ポパイは金持ちの子。／アイーダ：サンティアーゴのサン・マルコス大学での友人で、左翼女性。／ハコーボ：サンティアーゴのサン・マルコス大学での友人で、左翼男性。

（２）**アマーリア**の物語：**アマーリア**：ドン・フェルミンの家の召使い。あることで辞し、恋人と暮らすが…チョラ（インディオ系混血)。

トリニダー・ロペス：アマーリアの夫。事件に巻き込まれ殺害される。／オルテンシア奥様：美しい女性。歌手ムーサ。カヨ・ベルムーデスの愛人。アマーリアをかわいがる。／ケタ（ケティータ)：美しい女性。オルテンシア奥様と特別な関係にある。高級娼婦。／イボンネ：娼館の主人。

アンブローシオ：チンチャ（リマより南方、太平洋岸で、黒人系市民が多い）の出身。父親トリフルシオの暴力のせいで気の弱い人間になっている。ドン・カヨの運転手、のちドン・フェルミンの運転手をする。アマーリアの恋人。アマーリアとプカルパ（アマゾン川上流）に住むが…サンボ（黒人系混血）で、リマでは珍しがられる。

（３）**ドン・カヨ**の物語：**ドン・カヨ（ベルムーデス)**：金持ちの子。軍事独裁政権にスカウトされ内務局長となり、治安維持・民衆弾圧にらつ腕をふるう。白人のドン・フェルミンからはチョロ（インディオとの混血）と下位に見られることも。

エスピーナ将軍（セラーノ)：ドン・カヨと同級生で、ドン・カヨを政権にスカウトする。将軍となる。のち追放される。ドン・カヨからはセラーノ（インディオ、田舎者）と呼ばれる。／ロサーノ：ドン・カヨの手下。秘密警察。／イポリト：ロサーノの手下。／ルドビーコ：ロサーノの手下。

（４）新聞『ラ・クロニカ』紙の人々：カルリートス：サンティアーゴの先輩記者。アルコール中毒で死ぬ。／ベセラ（ベサリータ)：記者。／アリスペ：編集長

３　コメント：非常に読みにくい。場面、語り手、話法（直接話法、間接話法だけでなく自由間接話法という話法を多用しているということだ）などがどんどん入れ換わるので、全体のストーリーをつかむのが非常に難しい。一読では理解できず、各種の解説を参照し、二回目を読み、やっとおぼろげに姿が見えてきた。ペルーにおける貧富の格差、人種・民族問題などを背景として、独裁政権下、権力者の駆け引き、翻弄され押しつぶされる弱い女性、貧しい男が権力者に雇われもっと貧しい人々に暴力をふるう姿、父子の葛藤などを描き、社会と人間の在り方を問う。

主人公**サンティアーゴ・デ・サバラ（サバリータ)**は、昔の実家の使用人である**アンブローシオ**と再会し、ラ・カテドラルという名の大衆酒場で、昔を思い出して語り合う。昔、というのは、ペルーのオドリア独裁政権の時代（1948~56）のことであり、サンティアーゴの少年時代から大学生、新聞記者の時代を経て、偉大な父親フェルミン・ド・サバラが死ぬまでのころだ。

だが、あらためて俯瞰してみると、地球環境においてグローバル・ノースの繁栄はグローバル・サウスに問題を押しつけ成立している。グローバル・サウスにおける「勝ち組」がサンティアーゴの父親ドン・フェルミンであり、これへの異議申し立てをしているのがサンティアーゴやその仲間たちなのだ。もちろん搾取―被搾取の問題だけでなく親しい人との愛憎の問題をはらんで事態は進展していく。そして、この作品に描かれた世界は、過去の遠い南半球の話ではなく、今現在の私たち自身の話でもあるとしたら…？　　(図書研修課 Y)

４　**ペルー**　外務省のサイトによると、面積は日本の約3.4倍、2020年に人口3300万人。先住民26%、混血60%、白人6%、アフリカ系3.6%、その他（中国系、日系など）4.5%(2017年国勢調査)。